

○ヤクシマアヂサキについて (榎山泰一) Yasuichi MOMIYAMA: Notes on *Hydrangea grosseserrata* and its allies.

ヤクシマアヂサキ (*Hydrangea grosseserrata* Engl.) が、トカラアヂサキ (*H. Kawagoeana* Koidz.) と同種であることについては、すでに、初島氏のお説が、本誌 26:372~375(1951) に登載されている。ところで、ここに、近縁なものが、なお、一兩種あつて、その所屬が、さらに、問題になると思われる。それは、中支江西牯嶺 (Kuling) から記載された *H. umbellata* Rehd. et Wils. と、台湾宜蘭中嶺から報告された *H. angustipetala* Hay. のふたつである。それらは、葉も花も果実も、前種に酷似しており、多くの、しかも、おもな特徴において、さながら、ひきうつしにしたように、互によく、その形状が一致する。いま、その共通する形態を記載すると、まず、その小枝は、帯紫赤褐色を呈し、長楕円形の葉は、薄手で、黄緑を帯び、葉縁には、齒牙状の鋭鋸齒を具えている。花序は、無柄で、数箇の花軸が、枝端に兩対する葉の間から、直かに、繖形に出て、斜開し、多くの花を密に著ける。小花梗は、短く、果実の時にも、さして伸長しない。半円形の萼筒は果実の時、雌蕊の遊離部と等高、乃至、それよりもわずかに短く、花柱は、雌蕊の遊離部と等長で、斜開するが、強くは開かず、柱頭も、反曲するが、著しくは反り返えられない。花は白く、乾けば帯黄色になる。離在する萼片は、短小で、三角形。花瓣は、匏形で、狭く、雄蕊は、花瓣よりも少しく長くなる。葯は、楕円形に近い。不登花の萼片は、宿存し、著しく大形でもなく、また、甚しく不等大でもない。果実は、花柱を含めて、4-5-(6)mm、おおむね、近似種の *H. chinensis* Maxim. よりは小さい。小枝、葉、花軸、花梗、萼などに、黄褐色の、ちぢれたような、伏臥した、こわい毛がある。以上の共通点をほかにしては、葉のひろさ、鋸齒の大きさ、毛の多少、果実の大小などが、おのおのの種類において、相互に、ずれており、各種間に見られる形態の不一致は、おもに、これらの形質の変異に係わっている。そこで、この変化の模様を見ると、台湾の *H. angustipetala* は、葉の狭いものが多くて、時には、やや倒披針形に傾くものもある。鋸齒は、むしろ、小さめであるが、その中に、小齒牙状のものから、三角形の、やや著しい鋭鋸齒に至るまでの、かなりの程度の変化を含んでいる。小枝、葉、花軸、花梗、萼などの毛は、概して多いけれど、また、少ないものも稀ではない。次に、薩南諸島のは、葉がひろく、毛が少く、鋸齒が大きい、トカラ群島のは、屋久島産の *H. grosseserrata* との間にも、すでに、鋸齒の大きさには差があり、大きさの点において、鋸齒が変化し易い性質であることを、ここでも、よく示している。そして、屋久島のは、鋸齒が最も粗大である。支那のは、江西産 (*H. umbellata*) は、原記載及び中国植物図譜 3:31, pl., 131 (1933) によると、小齒牙状の鋸齒を有し、毛が多く、浙江杭州 (張宗緒 No. 73, 1916 東大所蔵) の標本は、大きな鋸齒をもち、毛が少い。大陸でもまた、鋸齒の大きさ、毛の多少に、かなり著しい変化のあることがうかがわれる。なお、支那産のは、他地方のものより、果実が、すこしく大きいように見える (6mm)。このよう

に、これらの変化は、個体差や、さらにまた、地方差というべきものもあらわしている。しかも、それが、かなり著しい程度の差違を示すので、各別の種類が、そこに、存在するかのよう[・]に考えられがちである。しかしながら、それは、全体としては、むしろ、連続的な変異を示していて、その間に、種類をちがえるほどの、大きな間隙があるとは思われない。その変化の中に、多少の断続するところが見られるにしても、それは、種内の地方差によるものと解して事足りる。また、実際、葉のひろさ、鋸歯の大きさ、毛の多少、果実の大小などの変異は、この属では、種的特徴にとりがたい場合があり、サハアヂサキなどが、その好例を示すのは、周知のことに属するが、この海南のアヂサキそれ自身の[・]変異も、またそれに劣らず、よく、これを示しているように思われる。要するに、ヤクシマアヂサキ以下の諸種は、各別の種類というべきものではなくて、それは、楊子江流域の、江西、安徽、浙江から、台湾北部、薩南諸島にかけて、ひろく分布するところの、ただ一箇の種にすぎないと考えられる。そして、その中に、多少、地方的変形が見られるのは、上にも述べた通りで、それらの相互関係は、台湾のは、支那のに近く、また、薩南諸島のは、それらから、やや隔つているように見うけられる。さて、種名は、*Hydrangia angustipetala* Hayata in Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, **30**-1; 107 (June 1911)-Icon. Pl. Formos. **1**, pl. 32 (Sept. 1911)-ibid. **2**: 4 (1912) (Formosa, Giran Chiurei) が最も古く、*H. umbellata* Rehd. et Wils. in Sarg. pl. Wils. **1**-1: 25 (July 1911) (China, Kiangsi Kuling); *H. Kawagoeana* Koidz. in Bot. Mag. Tokyo, **32**: 138 (1918) (ins. Tokara); *H. yakuimensis* Sugimoto in Nippon Journ. Bot., **1**-1: 19 (1926); *H. gross-serrata* Engl. in Engl. et Prantl, Pfl. fam., ed. 2, **18a**: 203 (1933) (ins. Yakushima); *H. Kawagoeana* var. *gross-serrata* Hatusima in Journ. Jap. Bot. **26**: 372 (1951) などは、その異名になる。 (資源科学研究所)

オリー氏のヒノキ科の分類に關聯して Sabina 屬を論ず (草下正夫) Masao KUSAKA: On the genus *Sabina*, relating with Li's classification of Cupressaceae.

アーノルドの雑誌にのつた Li 氏のショウナンボク属の分類及びヒノキ科の各属の類縁についての論文は大へん興味をもつて読んだ。中国のこうした人等が困難な時代を通じてタクソノミーに精進されるのは全く尊敬に値することである。(Li 氏以外では例へば H. Keng 氏の *Quartely Journal of the Taiwan Museum* **6**(1): 81, 1953 にのつたサッサフラスの分類等タクソノミカルに割切つたものが多い。) しかし Li 氏のヒノキ科の分類でちよつと筆者に納得のいかない点の一つある。それは *Sabina* (*Juniperus*, sect. *Sabina*) 属について何等言及していないことである。同氏は Pl. I 及び Pl. II に示されたヒノキ科諸属の毬果構造の模式図にあきらかな如く、毬果の鱗片の排列及び